アクティブラーニングを取り入れた教科指導と学級経営

－７つの習慣をもとにして－

教諭　　石黒　裕加

1　主題設定の理由

本校には素直で真面目な生徒が多い。８年前、初任校であった中学校から本校に赴任した時、高校でこれほど素直な生徒が多いのかと驚いたのをよく覚えている。しかし、それがここ数年、素直で真面目ではあるものの、主体性がなかったり指示されたことしかできなかったりする生徒が増えてきたように感じ始めていた。「指示待ち人間」という言葉が聞かれるようになって久しいが、本校の生徒でもこれに該当する生徒が増えてきたように感じた。ＡＩ（人工知能）がいずれ人間の仕事の多くを奪ってしまうと言われているこれからの時代は、主体的に物事を考え、自ら行動できる人間が社会では求められる。「指示待ち」になってしまう原因はあらゆるところにあると思われるが、いずれにしても生徒自身が「自ら考えて行動する」ことを意識していかなければ、人生をよりよく、主体的に生きられる生徒を育てることはできないと考えた。

また、本校は平成２８年度よりアクティブラーニングの研究校となっている。教科内で学んだアクティブラーニングを取り入れながら、総合的な学習の時間やＬＴの時間にもその実践を生かして、主体的に将来を見据えて行動できる生徒を育成したいと考え、主題として設定した。

2　研究仮説（実践の見通し）

先述の通り、本校の生徒は素直で真面目、中学校でも特に問題のなかった生徒が多い。また、学習面においてもコツコツ努力をしてきた生徒が多く、いわゆる「良い子」と言われるような生徒ばかりである。一方で指示されたことやそれに付随することはできても、主体的に考えて行動することができない生徒も少なくない。さらに、いわゆる「良い子」であったため叱られた経験も少ないので、自分の現状をよしとしている、つまり主体的な行動ができていないことに無自覚な生徒も多いのではないかと推測した。方法としては、既に昨年度から国語科の授業内で実施しているアクティブラーニングを取り入れる。自らの考えをもった上で他の生徒と意見交換をし、それをもとにしてもう一度自分の考えをまとめることで学びや理解が深まり、興味ももてることを生徒は実感している。そこで、現状を自覚させた上で、自ら考えて行動することの大切さが理解でき、互いに影響を与えあうことができれば、主体的な行動も伴うのではないかと仮説を立てた。

3　研究計画・研究方法

(1) 研究時期

平成２９年５月～平成３０年２月

(2) 研究対象

２年生の生徒（特に文系応用２クラス）

(3) 研究方法・計画

５月　アクティブラーニングの説明
６月　授業内でアクティブラーニングの実践（～１２月）
７月　進路研究（総合的な学習の時間）における意見交換
　　ＬＴなどを利用した７つの習慣の実践（～２月）
１０月　ＬＴ、ＳＴなどを利用して７つの習慣に基づく生活習慣の改善（～３月）
１２月　７つの習慣を生活に取り入れた結果の面談

＊「７つの習慣」について

スティーブン・Ｒ・コヴィーの著書。成功哲学などを説く。

第１の習慣　「主体的である」

第２の習慣　「終わりを思い描くことから始める」

第３の習慣　「最優先事項を優先する」

第４の習慣　「Win-Win を考える」

第５の習慣　「まず理解に徹し、そして理解される」

第６の習慣　「シナジーを創り出す」

第７の習慣　「刃を研ぐ」

以上の７つの習慣を身に付けることで、人格を養成し、人生を成功に導くことを説いたもの。大人が読んで実践するだけでなく、小中学校の道徳の授業で取り入れている場合もあり、中高生向けに書かれた著書もある。

４　研究の実際と考察（実践と検証）

(1) 古典の授業（２年１・２・８組対象…１２６名）

古典の授業は、これまで講義形式で行ってきた。それをすべてアクティブラーニング形式にするのは難しかったので、まずは各授業の発問（文法事項）の一部に意見交換や教え合いの時間を設けることにした。

ア　実践前の状態

２年生の１学期は、文法事項においても未習事項があり、ある程度は教員が解説をする必要はあった。しかし、既習事項においても生徒はわからないと教員の解説を待っているだけであり、自ら文法書などを調べようとする姿勢はほとんどなかった。この状態では、自宅学習でも効果は見込まれず、予習も不完全な状態で授業に臨む様子が見られた。

イ　実践内容

１期考査終了後（６月頃）から、実践に入った。予習前に古文の一部を指示し、指示した部分について品詞分解し、各単語について文法的に説明できるよう準備をさせた。授業ではその箇所について、近くの席の生徒とノートを交換し、自分の説明と違いがあれば、なぜその説明にしたのかを相手の生徒に解説をさせる。解説をさせる際には、参考にした文法書のページや辞書を見せ、相手にわかるように解説するよう指示した。始めたばかりの頃は、辞書にたまたま該当箇所の説明が載っていると、そのままノートに写してくるだけの生徒もいた。しかし、相手にわかるように解説することを求めたため、徐々に自分自身がきちんと内容を理解していなければならないことに気づき、文法書や単語帳、図説などを利用して調べようとする様子が見られるようになった。また、授業中でもわからないことがあるとすぐに文法書に手を伸ばす姿も多くなった。

ウ　実践結果

４月から週１回程度、１０点満点の小テストを行ってきた。毎回１０問程度ではあるが、文法事項をランダムに出題し、既習事項の定着度を図ることができるようにした。

１学期は品詞名も答えられない生徒もいたが、回数を重ねるごとに正しく品詞分解し、単語の文法的説明ができるようになった生徒が増えた。また、１月にとったアンケートでは、「友達に説明するのは思った以上に難しい」と答えると同時に、「最初はうまくできなかったけれど、友達にわかるように説明しようと思ったら、きちんとわかっていないといけないと思った。中途半端にわかっている時は、説明している途中で自分が何を言っているのかわからなくなってしまうことが多かった。」などの回答が複数見られた。

エ　実践後

これまでは、既習事項でも定着していないことが多くあり、その都度解説をしたり問題演習をしたりしていたが、この実践後は一度学習したことの定着がスムーズになったと感じる。また、指示した箇所以外も説明し合ったり、説明が不十分だった場合は指摘し合ったりすることもあり、生徒たちが自ら理解しようと努力している姿が非常に多くなった。

(2) ＬＴ・総合的な学習の時間での実践

「７つの習慣」には、第１の習慣から第７の習慣まであるが、すべてについて今年度行うのは不可能と判断したので、生徒の現状から第１の習慣から第４の習慣について実践することとした。また、第１の習慣は「主体的に行動する」なので、第２の習慣からスタートさせ、第３の習慣、第４の習慣を踏まえた上で第１の習慣に戻ることとした。

ア　第２の習慣…終わりを思い描くことから始める

(ｱ) 状況

本校生徒は、ほとんどが四年制大学進学を目指している。また、本研究の対象としたクラスは全員が国公立大学を目指していることから、方向性は全員がほぼ同じということができる。しかし、４月の面談では、クラスの生徒のうち明確な目標が決まっている生徒は５割程度であった。残りの生徒は「国公立大学を目指したい」という目標はあるものの、具体的な大学名、学部学科を挙げられなかった。大学入試において、ゴールの時期は明確に決まっており、また到達点もある程度明確に定めることができるが、その到達点を掲げさせるところから始める必要があった。

(ｲ) 内容

まず、総合的な学習の時間にＫＪ法を用いた進路研究（２時間）を行った。既に目標を決めている生徒は興味のある学部学科・学問内容について、まだ目標を定められていない生徒は好きな教科に関する学部学科・学問内容について調べ、付箋１枚に情報を１件記入していく。ある程度情報がまとまったところで、同じ学部系統を選んだ生徒数人ずつでグループになり、各自が書いた付箋を出し合い、情報について説明しながら模造紙に貼りつけていく。似たような情報を持っている場合は、同時に付箋を出し、情報の付け加えや差などについて意見交換をした。１時間目は付箋を出し合い、情報をまとめるところまでを行った。２時間目は、まとめた情報をもとに、模造紙に項目を立てて発表ができるように準備をした。また、不足している情報があればその都度、進路情報誌で調べ、付箋を付け加えた。発表の際には、調べた系統の学部学科で学べる内容、その学部学科に進学することで就ける職業について特に明確に発表できるよう指示した。発表後、他の班の発表を聞いて、新たに興味のある学部学科・学問系統があれば各自で調べることを指示し、夏休み中に参加することになっているオープンキャンパスの大学選択に生かすようアドバイスした。

(ｳ) 結果

夏の保護者会で面談をした結果、進路目標が定まらない理由は、就きたい職業が決まっていないために、大学の学部学科を決められないというものがほとんどであった。文系の場合は、必ずしも大学で学んだ内容と職業が一致するわけではなく、むしろ一致しないことの方が多いという話をすると、少し気楽に学部学科のことを考えられたようであった。総合的な学習の時間に行った進路研究で、そのことに気付くことができた生徒は夏休み前に、目標とする学部学科を決め始めることができた。いつまでもゴールを描けないまま高校生活を送るよりは、一つでも目標を見つけて早めに取り組むことが大切だと考える。学部学科と職業が一致するとは限らないと気付けたことにより、一歩前に進めた生徒が少なからずいた。

イ　第３の習慣…最優先事項を優先する

(ｱ) 状況

学習、部活動、行事など、高校生にとって、しなければならないことがたくさんある中で、優先順位をつけることは不可欠である。しかし、単純に締切期日の近いものから取り組むわけにはいかないことも多々ある。緊急度と重要度をしっかり分けて、正しく振り分けることで優先順位を決める力をつけさせることが必要だと感じた。

(ｲ) 内容

７月に、「夏休み中にやるべきこと・やりたいこと」を列挙させた。受験を意識した学習、進路についての調べ学習（オープンキャンパス参加）、学校の中心学年として取り組むべき部活動や学校祭準備などの学校における活動だけでなく、３年生ではなかなかできなくなってしまう家族旅行や趣味、友人との外出など、とにかく思いつくことを挙げさせた。その上で、４領域に分けられるワークシートを配布した（図１）。

配布したワークシートに、列挙させた「夏休み中にやるべきこと・やりたいこと」を一つずつ分類させた。また、分類していく過程でどこか一つの領域に集中していないかを確認させた。

分類させた結果、第Ⅰ領域の「緊急かつ重要」にかなりの項目を記入している生徒が多く、あまり意味がなくなってしまった。多くの生徒が第Ⅰ領域に分類した項目は、課題や苦手分野の克服など、学習関係の内容であり、細分化すると際限なく挙げられるものであった。そこで、夏休みを前半（出校日まで）と後半（出校日以降）に分けて考えるよう指示した。すると、苦手分野の克服を第Ⅱ領域に入れ直し、課題や課外授業の予習・復習のみを第Ⅰ領域に残すなど、工夫する様子が見られた。

	緊急	緊急でない
重要	【第Ⅰ領域】	【第Ⅱ領域】
重要でない	【第Ⅲ領域】	【第Ⅳ領域】

（図１）※ワークシートの一部

(ｳ) 結果

自分のワークシートができあがったところで、他の生徒のワークシートと交換させて、他の生徒からの意見を聞く機会を設けた。分類した本人にとっては第Ⅰ領域に入るものでも、他の生徒から見ると第Ⅱ領域や第Ⅲ領域に入るものや逆の場合もあった。自分と異なる意見を聞くことで、固定観念として本人がとらわれていたものを取り除くこともでき、分類の仕方を変え、優先順位を変えることにもつなげられた。

ウ　第４の習慣…Win-Win を考える

(ｱ) 状況

入試においては、周りの生徒みなが敵だと考えがちであるが、少なくとも学校内の生徒については、同じような目標に向かって共に努力する仲間であることを自覚させることが重要だと感じた。自分だけ良ければいいという意識は捨て、自分が周りのことを考えて生活・行動することが、ゆくゆくは自分のためになることを理解させ、周りの生徒は高め合う仲間だと信頼する気持ちを持たせることで、それぞれの力を伸ばす環境を作り出せると考えた。

古典の授業で実践した、文法事項を解説し合ったことがこの第４の習慣につながる。「自分だけが理解できればいいのではなく、相手も理解できるようにする。相手が理解できるようにするために、自分が理解した内容を相手に解説する。すると自分の理解も深まる」ということを、生徒が実感できれば、お互いに教え合い、学び合おうという意識も高まる。その経験の繰り返しが、自ら学ぶ姿勢にもつながる。

(ｲ) 方法

この実践は４月から行ったものと９月から行ったものがある。９月の類型選択指導の際に、受験は団体戦で、周りにいる生徒は敵ではなく、共に高め合っていく仲間であることを話した。古典の授業での活動が、この Win-Win につながっていることも合わせて伝えた。毎日提出させている「生活と学習の記録」（図２）で１日の学習時間を記入させ、１週間の学習時間を集計したグラフを教室掲示した。この「生活と学習の記録」はＢ５用紙１枚で、その日の起床時間・就寝時間・学習時間を帯グラフに記入させ、下の余白には自由学習欄を設けた。学習時間を集計したグラフ掲示は、自宅学習の時間をあまり取れていない生徒を刺激し、少しずつでも学習時間を増やしていけるよう意識させることができた。また、本校で毎朝実施している積小テストの合格レースを行い、合格したらシールを貼り、合格数を視覚化する（図３）ことでモチベーションを維持させた。

37回生　生活と学習の記録　　～努力を継続できることが才能である～

月　日（　）　　２年１組　番　氏名

＊起床時間と就寝時間をチェックし、学習時間帯には色をつけよう。

6	8	10	12	2	4	6	8	10	12	学習時間	学習教科
										分	英・国・数 社・理・他
何でも書け！（目標でも反省でもつぶやきでも可。漢字の練習でもOK！）										積小科目	合否
											合・否

何事もひたすら書いて覚えるべし！枠一杯に何度も何度も書きまくれ！

（図２）「生活と学習の記録」　この下は余白で、自由学習欄。

（図３）積小テスト合格レース表

(ｳ) 結果

これらは毎日実施していることで、時には気分の乗らない日があったり、うまくいかない時があったりするが、常にクラスの仲間が頑張っていることを認識させることにもつながり、「みんなが頑張っているから自分も頑張ろう」という気持ちを持続させることにもつながった。

エ　第１の習慣…主体的である

上記のア～ウを実践したことで、４月の面談で「勉強は仕方なくやっている」と言っていた生徒も、１１月～１２月の面談では「みんなが頑張っているから、自分も頑張ろうと思える」「誰かに言われて勉強するより、自分で勉強をし始めたほうが、やる気が長く続く」と答えるようになった。もともと素直に物事を受け取る生徒が多かったので、ちょっとした周囲からの刺激を受け、それを自分の行動に反映させていくことができたようである。

この第１の習慣は、「ア　第２の習慣」から「ウ　第４の習慣」を実践した結果、生徒自身が認識し始めたものであり、具体的な実践をしたわけではない。しかし、３つの習慣を心掛けると主体的な行動につながるということを、何よりも生徒自身が自覚することができ、よりモチベーションを保つことにもつながった。

５　研究の成果

本校の生徒が素直で真面目である分、目の前のことだけに集中しがちであったり、言われたこと

だけをこなすだけで精一杯であったりとマイナス面も見られた。しかし、本研究で他者の意見を聞きながら、それを自分の行動や生活に反映させ、今までよしとしてきた習慣を見直すことができた。普段、正しいと思っている、あるいはベストだと思っている行動も、見直す要素があらゆるところに存在しており、常に自ら見直し続ける意識を持つことで、よりよい行動、生活につながると理解できた生徒が多くいた。現在も続けている「生活と学習の記録」の自由記述欄に「今日の第Ⅰ領域」を書き込み、必ず実行している生徒もいる。

また、４月の面談で「どの大学、学部学科を目指したらいいかわからない」と言っていた生徒が５割程度いたが、夏の保護者会では３．５割程度に減り、１月には２割弱に減った。いずれも「中学生（高校入試）までは親や先生の言うとおりにしてきたから、自分の将来のことをどのように考えたらいいかわからない」と言っていた生徒だったが、自分で進路について調べた経験があまりないことによる結果であった。もともと素直に他者の意見を聞く面があったので、教員のアドバイスも素直に受け取り調べ学習をし、仲間のさまざまな意見に耳を傾け、同時に自分がしたいことを模索していくきっかけになったようである。

これまで私自身も、素直で真面目であることをプラスにだけとらえてきたが、それは同時に主体性の乏しさにつながりかねないことを改めて認識した。一方で、素直さや真面目さがあることは、他者からのアドバイスや意見に耳を傾けられるということなので、主体的に行動することの大切さを説き続けていくことで、そのような生徒の習慣に変化が起きると考える。生活習慣、行動習慣に関する指導は継続性が重要なので、今後も継続して実践することが必要だと考えている。

6　今後の課題

アクティブラーニングの実践はまだ始まったばかりで、今後さまざまな方法の研究が進められると考える。また、「７つの習慣」の実践はすぐに効果の出るものばかりではない。しかし、これらを継続的に行っていくことで、主体的に学ぶことや行動することの意義自体を生徒自らが考えられるようになる。本研究では、教科のアクティブラーニングと「７つの習慣」を関連付けての実践を試みた。方法について関連性を持たせることは可能であったが、生徒の意識の中で結びつくところまでは到達しなかった。どのような学びも、継続性（縦のつながり）が大切であることは理解しているが、関連性（横のつながり）もあるということはあまり理解させられなかった。本研究で実践したことを来年度以降も継続して行いたい。

7　参考文献等

・『７つの習慣×アクティブラーニング　―最強の学習習慣が生まれた！―』
小林昭文、フランクリン・コヴィー・ジャパン　産業能率大学出版部　2016 年

・『７つの習慣　成功には原則があった！』
スティーブン・Ｒ・コヴィー　キングベアー出版　1996 年
・『７つの習慣　ティーンズ』
ショーン・コヴィー　キングベアー出版　2002 年
・『７つの習慣　ティーンズ２　－大切な６つの決断　選ぶのは君だ－』
ショーン・コヴィー　キングベアー出版　2008 年
・『７つの習慣　演習ノート』
スティーブン・Ｒ・コヴィー　キングベアー出版　2005 年